

カルロス・デ・シグエンサ・イ・ゴンゴラ  
『アロンソ・ラミレスの非運』  
—翻訳と注釈—

中井 博康

Carlos de Sigüenza y Góngora's *Infortunios de Alonso Ramírez*:  
A Translation with Explanatory Notes (1)

NAKAI Hiroyasu

Carlos de Sigüenza y Góngora (1645-1700) was a well-known 17th-century Mexican intellectual who is today regarded as a Creole historian preoccupied with placing the vice-royal New Spain in a universal context. Among his prolific writings, the *Infortunios de Alonso Ramírez* [Misfortunes of Alonso Ramírez] (1690) is the most popular and valued of his works today. This first-person account of the development of Puerto Rican Creole has been seen by many critics as fiction because of its literary nature, but recent linguistic and literary studies suggest that it may actually be based on fact. This is a translation with explanatory notes, of the original title, dedication, publishing licences and the Chapter I.

### はじめに

17世紀後半、数学者、天文学者、地誌官、歴史学者、そして詩人として、数多くの著作を手掛けたカルロス・デ・シグエンサ・イ・ゴンゴラ Carlos de Sigüenza y Góngora (1645-1700) は、ヌエバ・エスパニャ副王領のみならず、植民地時代のラテンアメリカを代表する知識人のひとりとされる。現代では、詩人あるいは文学者としてよりも、むしろ19世紀初頭の独立運動につながるクリオーリョ主義やナショナリズム、また啓蒙主義といった思潮の思想的先駆として重要視されているが、例外的にその文学性が評価され、ラテンアメリカにおける小説の先駆的作品とまでみなされているのが、1690年に執筆・出版された『アロンソ・ラミレスの非運』 *Infortunios de Alonso Ramírez* である。

「語り手」のアロンソ・ラミレスは、貧困を逃れるために故郷プエルト・リ

コを後にし、メキシコに渡って転職と流浪を繰り返し、ついにはフィリピンでイギリスの海賊に拿捕され、奴隷として使役されながら世界を周航、ついにユカタン半島に漂着する。その波乱万丈の半生をシグエンサ・イ・ゴンゴラが口述筆記した報告書という体裁をとるこのテキストは、一方では、史料とみなされて、アロンソ・ラミレスの实在性の実証が試みられ、他方では、全くの創作とみなされて、その虚構性が強調されてきた。この辺りの事情については機会をあらためて論ずることにするが、いずれにせよ、熱烈なクリオーリョ主義やナショナリズムの思想に貫かれたシグエンサ・イ・ゴンゴラのテキスト群の中であって、クリオーリョの悲惨な体験を延々と報告する『アロンソ・ラミレスの非運』は、特異な性格を持ったテキストであるといえよう。

翻訳にあたっては、いずれも1690年の初版に基づく三種類の校訂版 (*Los infortunios de Alonzo Ramirez*, edited by J. S. Cummins and Alan Soons, London: Tamesis Texts Limited, 1984; *Seis Obras*, edición, notas y cronología de William G. Bryant, Caracas: Biblioteca Ayacucho, 1984; *Infortunios de Alonso Ramirez*, estudio preliminar y edición de Antonio Lorente Medina, Madrid: Iberoamericana, 2017) を底本とし、英訳とイタリア語訳を適宜参照した。注釈については、校訂版に付されたものを参考に作成した。

## 翻訳と注釈

### 【題名】

プエルト・リコのサン・フアン生まれのアロンソ・ラミレスが  
フィリピン諸島でイギリスの海賊に拿捕され  
孤独のうちに漂流しながら世界を一周し  
ユカタン半島に漂着するまでに被った不運の数々

国王陛下親任のメキシコ学術院宇宙誌学者 兼 数学教授  
ドン・カルロス・デ・シグエンサ・イ・ゴンゴラにより口述筆記

メキシコ市にて出版を許可され  
バルナルド・カルデロンの寡婦の相続人により  
1690年、サン・アグスティン通り<sup>1</sup>にて出版

### 【献辞】

ガルベ伯爵 兼 王立議会議員 兼 アルカンタラ騎士修道会サラメア騎士団長およびセクラビン騎士団長 兼 トレド市の王城・門・橋およびレオン市の城・塔の終身守備隊長 兼 トルトラ市およびサセドン市領主 兼 ヌエバ・エスパニャ副王 兼 総裁 兼 軍司令長官 兼 メキシコ大審問院長にあらせられる、やんごとなきドン・ガスパル・デ・サンドバル・セルダ・イ・メンドサ陛下<sup>2</sup>

厚顔こそ果報をもたらし、大抵の過失は容赦されうるものでございますれば、すでに本年、拙著『天文学と哲学の天秤』<sup>3</sup>が、博識で聡明な陛下のご嘉賞にあずかり、ご支援を賜りまして出版の運びとなりましたが、(容赦されざる過失を犯さぬよう) 遠慮するのではなく、更なる庇護を期する僭越をどうかお赦し下さい。陛下は、ある苦労人がその苦難のあらましを奏上するのを慈悲深くお聞きくださったのですから、いまこうしてお目汚しに供します詳細な報告書も、必ずやご関心をもってお目通しいただけるものと存じます。アロンソ・ラミレスは、フィリピンで海賊に拿捕され、世界を一周して、ここアメリカのユカタンの海岸に座礁、メキシコでその苦難の旅に終止符を打ちました。彼が陳述するのをお聞きになって憐憫の情をお示しになった陛下が、今後も彼を慈し

- 
- 1 サン・アグスティン通り [Calle de San Agustín] : 現在のウルグアイ通り [Calle de Uruguay] にあたる。
  - 2 ガスパル・デ・サンドバル・セルダ・イ・メンドサ [Gaspar de Sandoval Cerda y Mendoza] : ガスパル・デ・ラ・セルダ・イ・メンドサ (1653-1697) はヌエバ・エスパニャ副王領の第30代副王 (在位1688-1696)。イギリスやフランスの海賊の襲撃に備えるため、メキシコ湾やカリブ海の防衛強化に務めた。シグエンサ・イ・ゴンゴラは同副王の信頼が厚く、その在位中に作品5篇が出版された。
  - 3 『天文学と哲学の天秤』 [*Libra astronómica y filosófica*] : 1680年から翌年にかけて出現した巨大なキルヒ彗星について考察したシグエンサ・イ・ゴンゴラの論考。同彗星に関しては、シグエンサ・イ・ゴンゴラと同じく天文学者・数学者・地図製作者でもあったイタリア出身のイエズス会士エウセビオ・キノ [Eusebio Kino] (1644-1711) が、スペインのカデイスでの観測を踏まえて1681年にメキシコで『彗星の天文学的解説』 [*Exposición astronómica del cometa*] と題する論考を出版し、彗星は凶兆であると解釈していた。これに対してシグエンサ・イ・ゴンゴラは同年、『彗星に対する哲学的声明』 [*Manifiesto filosófico contra los cometas*] を発表して当時一般的だった非科学的な解釈に反駁、両者の間で激しい論争となった。『天文学と哲学の天秤』は、この論争を踏まえ、自身の科学的な解釈をあらためて周知するために発表された。

まれることをいったい誰が疑うでしょうか。陛下は、その優しさでご自身の偉大さを和らげておられますが、この二つは実に見事な均衡を保っておりますので、陛下において優れているのは、やんごとなき父祖より受け継がれた偉大さなのか、それとも悲嘆に暮れる者を決して拒むことのない天性の慈愛なのか、どれほどの慧眼であっても、判断するのは無理でございましょう。私は日々、陛下の深い慈愛を拝してこれを疑わず、困窮する者に副王宮の門戸が閉ざされることは決してないと確信しておりますので、この痛ましい遍歴譚を私に語り聞かせた当人に代わり、寛仁なる陛下の御前に奉ります。私といたしましては、世界の水路学と地理学に驚くほど精通しておられる陛下ならば、必ずやその真価をお認めになり、ご支援を賜われることと存じます。

陛下の御手に接吻いたします  
ドン・カルロス・デ・シグエンサ・イ・ゴンゴラ

#### 【認可証】

ヘスス・マリア・デ・メヒコ王立修道院<sup>4</sup>の司祭  
ドン・フランシスコ・デ・アイェラ・サンタ・マリア学士<sup>5</sup>による認可証

わが同胞アロンソ・ラミレスの苦難について、国王陛下親任の宇宙誌学者であり王立大学の数学教授であるドン・カルロス・デ・シグエンサ・イ・ゴンゴラ氏が詳記した報告書を検閲するようにとの勅命に畏服し、また前代未聞の出来事にも興味を惹かれて、同報告書を精読いたしました。当初こそ服務と好奇

- 
- 4 ヘスス・マリア・デ・メヒコ王立修道院 [Convento Real de Jesús María de México] : 1580年に創設された、コンセプション修道会 [la Orden de la Concepción] の修道院。シグエンサ・イ・ゴンゴラは『西方の楽園』[*Paraiso Occidental*...] (1684年)で同修道会の修道女たちの模範的な修道生活を記録し、クリオーリヨの宗教心の篤さを強調している。
  - 5 フランシスコ・デ・アイェラ・サンタ・マリア [Francisco de Ayerra Santa María] : プエルト・リコ出身の聖職者・詩人 (1630-1708) で、ヘスス・マリア・デ・メヒコ王立修道院の司祭を務めた。シグエンサ・イ・ゴンゴラとも親交が深く、1682年と1683年に開催された詩のコンクールをシグエンサが記録した『バルテノンの勝利』[*Triunfo Parténico*...] (1683年)には、彼の受賞作がシグエンサの激賞とともに収録されている。

心から読み始めましたが、実に多様な椿事が緊密な構成の下に見事に記述されておりましたので、煩瑣な作業だと思われたものがこの上ない恩恵であったことに深く喜悅いたしました。この報告書の人物は、今やその苦労が二重の意味で祝福されたことに満悦することと存じます。と申しますのも、第一に、苦難を見事に耐え忍んだからですが、マントヴァの詩人<sup>6</sup>は、同じような境遇にあったトロイア人たちを、アエネアスの口を借りて、次のように称賛しております、「けだしいつの日かこれらを思い出すことも楽しからん」<sup>7</sup>と。そして第二には、アウソニウス<sup>8</sup>が往時の皇帝を賛して「ローマのホメーロスすら陛下を称えん」<sup>9</sup>ことを望んだように、当世のホメーロスの筆により記録されるという僥倖に恵まれたからでございます。と申しますのも、種々の災難は混然と語られておりましたが、整然と語り直されることにより命を吹き込まれ、曲折に満ちた迷宮だったものはひとすじの金の糸を与えられて、絶賛を博すべき報告となったからでございます。著者が、その博識と丹精を尽くして、引き受けた仕事に取り組み見事に成し遂げるのは、今に始まったことではなく、また、地理学や水路学に造形の深い著者が、すでに半ば仕上げていたのであれば、これほど高い完成度を誇るのも驚くにはあたりません。題材は実体さえ備えていればよく、あとは彫琢されるのを待つのみだったのです。また、書き留めて博覧に供すべきものを語らせて終わりにすべきではなく、どのような話も記録されれば残り、記録されなければ時間と共に忘却されるのですから、このような前代未聞の出来事は、是非とも後世のために記録されなければなりません。「望むらくは我が言葉の書き留められんことを、望むらくは我が言葉書に記されんことを、望むらくは鐵の筆と鉛とをもて之を永く盤石に鐫つけおかんことを」<sup>10</sup>。ヨブは自分の言葉を後世に伝えるため、記録してくれる人を望んでおりました

6 マントヴァの詩人 [la musa de Mantua] : 古代ローマの詩人ウエルギリウスのこと。

7 けだしいつの日か… [Forsam et haec olim meminisse iuvabit] : ウエルギリウス『アエネーイス』(1・203)からの引用。

8 アウソニウス [Ausonio] : ローマ帝政末期の詩人デキムス・マグヌス・アウソニウス [Decimus Magnus Ausonius] (310-393頃) のこと。

9 ローマのホメーロス… [Romanusque tibi contingit Homerus] : アウソニウスが皇帝ガッリエヌスを讃えたエピグラム中の言葉 (Exulta Aeacide, celebraris vate superbo, / rursum Romanusque tibi contingit Homerus) からの引用。

10 望むらくは… [Quis mihi tribuat ut scribantur sermones mei? Quis mihi det ut exarentur in libro stylo ferreo, vel saltem sculpantur in silice?] : 『ヨブ記』(19・23-24)からの引用。

し、それも、自分の耐え忍ぶことのできたすべてを、それこそ硬い石にたがねで刻み付けるのでなければ納得しませんでした。聖書の注釈にもありますように「かかる苦難を忍びし者は、沈黙のうちに置かるるを望まず、鑑として白日に晒さるるを望む」<sup>11</sup>のでございます。そして、口述した男性は、この「望むらくは」というヨブの言葉と、彼自身が望んだことすべてを、本報告書の著者に見出したのです。検閲すべき箇所は見当たりませんので、広く周知して公益に供すべく、出版して不朽のものとするのが適切かと存じます。以上、卑見まで。

メキシコ市、1690年6月26日  
ドン・フランシスコ・デ・アイエラ・サンタ・マリア

### 【出版許可】

やんごとなき副王陛下ガルベ伯の1690年6月26日付の勅命および、当大司教区の教会判事 兼 司教総代理ドン・ディエゴ・デ・ラ・シエラ博士<sup>12</sup>が同日に下した判決により、当報告書の出版を許可する。

## 第1章

故郷を後にした事情、ヌエバ・エスパニャでの就労と放浪、  
メキシコ市滞在からフィリピン諸島に渡航するまで

ご興味のある方は、しばしの間これをお読みいただき、何年にもわたって辛酸を舐めてきた私の話に耳をお貸しいただければ幸いに存じます。もっとも、創作された、作者の頭の中のみ存在するような出来事の場合には、箴言や教訓が込められておりますので、話でもって楽しませながら読者の教養を深めて

- 
- 11 聖書の注釈 [Glossa] : 中世の聖書注釈書『グロッサ・オルディナリア (標準注釈)』 [Glossa ordinaria] のこと。引用部の原文は「Dura quae sustinet, non vult per silentium tegi sed exemplo ad notitiam pertrahi」。
- 12 ディエゴ・デ・ラ・シエラ [Diego de la Sierra] : アギアル・イ・セイハス [Aguiar y Seijas] がメキシコ大司教を務めた時期 (1681-1698) の司教座聖堂参事会員。ソル・ファナの『アテナ書簡』 [Carta Atenagórica...] (1690年) の出版許可も担当した。

くれるものですが、私はそのようなお話をするつもりはございません。皆様のお情を集めて、苦しかった頃の自分を憐み、たとえ艱難辛苦が過ぎ去った後であっても、その記憶を少しでも和らげたいのでございます。とは申しまして、お涙頂戴の誇りを招くほどわが身を嘆いているわけでもございませんので、たとえ他の方ならば悲嘆に暮れるであろうことであっても、私には取るに足りないようなものは省略し、自分が味わった辛苦の中でも、どうしても忘れることのできない、主要なものに限ってお話することにいたします。

私は、名をアロンソ・ラミレスと申しまして、プエルト・リコ島の首都サン・ファンで生まれました。この島は、以前はポリケンと呼ばれておりまして、メキシコ湾<sup>13</sup>と大西洋の境界を分けておりますが、スペインからヌエバ・エスパニャに渡航する者たちには、休息して乾いた喉を潤す飲み水の補給地<sup>14</sup>として、あるいは風光明媚な湾や堅固なモロ要塞<sup>15</sup>、あるいは島を防衛するための大砲を備えた幕壁や稜堡といったもので、その名を知られております。もっとも、要塞などはインディアスの他の地にもございますので、海賊の攻撃から島を守っておりますのは、ひとえに島民の持って生まれた気質だといえましょう。実際、島民はその名誉心と忠誠心ゆえに実に堂々としております。とはいえ、かつては金鉱のおかげで富み栄え、その豊さをもって知られたこの島も、まず採掘する原住民がいなくなり、今度はカカオが黄金に代わって商人をはじめとする島民たちに必要なものをもたらすようになったのですが、そのカカオの木も激しい暴風雨に痛めつけられた結果、今ではすっかり貧困に喘ぐ島になってしまいました。

特に困窮した者の中には私の両親もおりましたが、まじめに働いていたのにそうなったのですから、これはもう仕方のないことでして、インディアスで暮らす代償というよりほかありません。父の名はルカス・デ・ピリャヌエバ<sup>16</sup>と申しまして、出生の地は分かりませんが、アンダルシアの生まれだと何度も聞かされましたので、そうなのだと存じます。他方、母の方はよく存じておりまして、

13 メキシコ湾 [Seno Mexicano]：現カリブ海域は、当時このように呼ばれた。

14 飲み水の補給地 [aguada]：プエルト・リコ北西部には、アグアダ [Aguada] やアグアデリャ [Aguadilla] という地名が残っている。

15 モロ要塞 [Morro]：1533年に建設が始まり1650年に完成したサン・フェリペ・デル・モロ要塞 [San Felipe del Morro] のこと。

16 ルカス・デ・ピリャヌエバ [Lucas de Villanueva]：ピリャヌエバという名字から改宗ユダヤの家系である可能性が指摘されている。

私と同じくプエルト・リコのサン・フアンのものでございます。名はアナ・ラミレスといい、信仰の篤いキリスト教徒でして、貧乏人が子に与えるものといえは説教くらいのものでありますから、幼い頃から私は、間違っただけはするなどと言われて育ちました。父は船大工をしております、私がある年齢に達すると、すぐに仕事を手伝わせましたが、常に仕事があるわけではなく、暮らしも不安定でしたので、まだ子どもではありましたが、不便な生活を逃れるために故郷を捨て、他所でもっとましな暮らしをしようと心に決めたのでした。

折しもフアン・デル・コルチョ<sup>17</sup>船長のウルケタ船<sup>18</sup>がハバナに向けて出港するところでしたので、これ幸いと、1675年のことですから13歳に達しておりませんでした、見習い水夫として船に乗せてもらいました。仕事はさほど辛くはなく、むしろ材木を切る苦勞がなくなりましたので、自由の身になった気すらいたしました。とはいえ、正直に申しますと、おそらく先行きが案じられたので、わが運命を開くにあたってコルクに身を委ねたのは正しかったのか、自信が持てずにおりました。そして、このような門出がどのような結果をわが身にもたらしたかをご覧になれば、私の不安は見事に的申したと誰もがおっしゃることでしょう。バルロベント諸島<sup>19</sup>の恩恵を受けている者の間では、その快適な気候や難攻不落の要塞によって知らぬ者はないハバナ港を出発し、ヌエバ・エスパニヤのサン・フアン・デ・ウルア<sup>20</sup>に渡りましたが、私はそこで船長に別れを告げ、プエブラ・デ・ロス・アンヘレス<sup>21</sup>を目指しました。ハラパ<sup>22</sup>からペロテ<sup>23</sup>までの道は険しく、それまで経験したことのない厳しい寒

17 フアン・デル・コルチョ [Juan del Corcho] : フアン・ミゲル・コルソ [Juan Miguel Corso] (ジョヴァンニ・ミケレ・コルソ [Giovanni Michele Corsouan]) はコルシカ出身の私掠船長 (?-1685)。スペインに対する海賊行為に対抗するための勅令 (1674年2月22日付) により敵艦略奪許可を得て、ユカタンおよびキューバの沿岸警備に当たった。なお「コルチョ」はスペイン語で「コルク」を意味する。

18 ウルケタ船 [urqueta] : 小型の貨物船。

19 バルロベント諸島 [islas de Barlovento] : 「風上諸島」を意味し、現在の小アンティル諸島のリーワード諸島 [Leeward Islands] とウィンドワード諸島 [Windward Islands] に相当する。

20 サン・フアン・デ・ウルア [San Juan de Ulúa] : メキシコ南東部の港湾都市ベラクルス付近に位置し、ベラクルス防衛のために要塞化された島。

21 プエブラ・デ・ロス・アンヘレス [Puebla de los Ángeles] : 内陸の首都メキシコ市と港湾都市ベラクルス市を結ぶ要衝の地に位置する都市。現在のプエブラにあたる。1531年、モトリニアらフランシスコ会士の要請で建設され、植民地時代を通じて経済・宗教の中心地として栄えた。

さに身を切られるなど、少なくない苦勞を重ねました。プエブラの住民によれば、同市はメキシコ市に次ぐ大きさを誇り、広々とした道路や広大な寺院をはじめ、その他諸々の事物についても引けを取らないとのことでした。これほど大きな都市を見たことのなかった私は、ここならば働き口も容易に見つかるだろうと判断し、あまり深く考えもせず腰を落ち着け、他に実入りのよい仕事が見つかるまでの間、大工職人の手伝いをして糊口を凌ぐことにいたしました。

ところが、そこで私は6ヶ月を無駄に過ごしたばかりか、プエルト・リコにいる時よりもひどい空腹を味わったのでございます。故郷を捨てたのに世知辛い土地に行き着いただけの私は、浅はかな判断をした自分を呪いながら、馬方の一団に加わると、今度はさほど苦勞することなくメキシコ市に移動しました。それにしても、この壮麗な都市の威容が、黄金の板にダイヤモンドで刻まれて周知されていないのは本当に不思議です。大きな湖の上に築かれておりますので、他所から来た者は南側の堤道から入ることになりますが、私は足を踏み入れるや、それまで壮大だと思っていたプエブラのことをすっかり忘れてしまったほどです。メキシコ市の人たちは大変に鷹揚で、この都市が称賛される大きな理由のひとつになっておりますが、それは安心して暮らすために必要なものがすべて潤沢に揃っているからなのでございます。そこで私は運を天に任せ、口に糊するために働き始めました。幸いクリストバル・デ・メディナ<sup>24</sup>という大工の棟梁で建築家の先生が雇ってくださったので、お仕事をお手伝いしてはかなりの報酬をいただいて、一年ほど過ごしました。

その後、メキシコからオアハカ<sup>25</sup>に向かいましたが、それは母方の親戚のひとりドン・ルイス・ラミレス<sup>26</sup>が市参事会議員を務めていることを知って、そ

22 ハラバ [Jalapa]：メキシコ南東部ベラクルス州の現州都。ベラクルスとプエブラを結ぶルート上にあり、ベラクルスの北西に位置する。

23 ペロテ [Perote]：ベラクルスとプエブラを結ぶルート上、ハラバの西に位置する。標高2360メートルにあり、気候は寒冷で乾燥している。

24 クリストバル・デ・メディナ：クリストバル・デ・メディナ・バルガス・マチュカ [Cristóbal de Medina Vargas Machuca] (1635-1699) は当時のメキシコを代表する建築家で、数多くの公共工事を請け負っている。シグエンサ・イ・ゴンゴラと親交があり、二人ともメキシコ市の給水事業や浚渫事業に関与しているほか、シグエンサが司祭を務めたアモル・デ・ディオス病院 [Hospital Amor de Dios] の彼の部屋を工事したり、1691年のインディオ暴動の際には、メキシコ市の歴史に関するシグエンサの蔵書を火事から救出するために、部屋の壁を壊して手伝ったという逸話がある。

25 オアハカ [Oaxaca]：メキシコ南部の州。

のつてを求めたのでございます。成功するための足がかりとまではいかなくとも、少しは救いの手を差し伸べてくれるだろうと期待してのことでした。ところが、80レグア<sup>27</sup>も移動した末に手にしたものといえば、親戚関係を否定する口汚い言葉でしかなく、予想もしていなかった冷遇に深く傷ついた私は、赤の他人に頼るほかありませんでした。そんな次第で、今度はファン・ロペスという行商人のもとで働くことになりました。親方はミシェ族、チョンタル族、クイカテカ族<sup>28</sup>といったインディオを相手に、カステイーリヤの商品と、綿、綿布、バナナ、カカオ、コチニールといった彼らの特産物を交換しておりました。そのためには険しい山を越えなければならないのですが、それは切り立った細い道から何度も転落しそうになったり、谷の深さにおののいたり、降り続く雨やぬかるみに悩まされるということなのです。しかも小さな谷は蒸し暑くて蚊が多く、どこに行っても誰もが忌み嫌う害虫がいるのです。

それにもかかわらず、成功したいという気持ちが強かった私は、苦勞が多ければそれだけ見返りも大きくなるものと信じて、親方に付き従い、あらゆる苦勞を忍んだのでございます。私どもはチアパ・デ・インディオス<sup>29</sup>まで行き、そこからソコヌスコ<sup>30</sup>やグアテマラの町村にまで足をのびしました。とはいえ、禍福は糾える縄の如し、明るく栄る昼に暗鬱と塞ぐ夜が続くように、オアハカに戻る途上、親方がトラリスタク<sup>31</sup>で病に倒れてしまひまして、終油の秘跡が施されるほどに重篤な様相を呈したのでございます。私は、親方の仕事を恨む

26 ルイス・ラミレス：ルイス・ラミレス・デ・アギラル [Luis Ramírez de Aguilar] は、1674年からオアハカのグアダルカサル [Guadalcazar] (現サント・ドミンゴ・テワンテベック [Santo Domingo Tehuantepec]) の行政長官兼大判事 [alcalde mayor] を、1676年からは同じくオアハカのアンテケラ (現オアハカ・デ・フアレス) の市参事会議員 [regidor] を務めたほか、オアハカ郊外にアシエンタをいくつか所有していた。

27 レグア [legua]：昔の距離の単位 (約5572メートル)。80レグアは約445キロメートル。

28 ミシェ族、チョンタル族、クイカテカ族 [mixes chontales, cuicatecas]：ミシェ族はメキシコ南部オアハカ州の北東部の、チョンタル族は同州南東部の、クイカテカ族は同州北部の先住民。

29 チアパ・デ・インディオス [Chiapa de Indios]：現在のメキシコ南部チアパス州チアパ・デ・コルソ [Chiapa de Corzo]。

30 ソコヌスコ [Soconusco]：メキシコ南部チアパス州の南西部、グアテマラとの隣接地域に位置し、当時はグアテマラ総督領 [Capitanía General de Guatemala] に属していた。古くからメキシコ盆地と中央アメリカを結ぶ交易路における要衝の地だった。

31 トラリスタク [Tlalixtac]：メキシコ南部オアハカ州中央部に位置し、現在のトラリスタク・デ・カブレラ [Tlalixtac de Cabrera] にあたる。

とともに自分の仕事を恨み、もう少し穏やかに生きていけるような仕事はないかと思いを巡らせながら過ごしたのですが、親方が回復しますと、嵐のような悩みもすっかり晴れたのでございます。しかし、この晴天が続くことはありませんでした。と申しますのも、旅路を進めてクイカトラン<sup>32</sup>まで戻ったところで、病気が再発いたしまして、なす術もなく息を引き取ったのでございます。親方の相続人からは働いた分は受け取ってほしいと言われましたので、ありがたく頂戴し、わが身とわが不運を呪いながら、メキシコに戻ることにいたしました。ただ、少しくらいリアル銀貨を手にしてからにしたいと思いましたので、プエブラで働くことにしたのですが、雇ってくれる親方が見つからず、以前も大変な空腹を経験しておりましたので、帰路を急ぐことにいたしました。

ところで、クリストバル・デ・メディナ先生にお世話になったのは一年ほどのことでしたが、私は一所懸命に働きましたし、また私を知る方々も私の働きぶりをよくご存じでしたので、私がメキシコ市民になれるよう手助けしてくださいました。そして、メキシコ市大聖堂の参事会長をお務めだったドン・ファン・デ・ポブレテ様<sup>33</sup>のご令妹ドニャ・マリア・デ・ポブレテ<sup>34</sup>様は寡婦におなりになって久しかったのですが、そのご令嬢のフランシスカ・ハビエル<sup>35</sup>と婚姻を結んだことにより、晴れてメキシコ市民になったのでございます。ドン・ファン・デ・ポブレテ様といえば、マニラ市大司教をお辞めになり、不死鳥のように祖国にお戻りになって最期をお迎えになった方ですが、その品行の方正たるや、永遠に記憶されんことを望む者にとっては鑑のようなお方です。

32 クイカトラン [Cuicatlán]：メキシコ南部オアハカ州北部に位置し、現在のサン・ファン・パウティスタ・クイカトラン [San Juan Bautista Cuicatlán] にあたる。

33 ファン・デ・ポブレテ [Juan de Poblete]：アロンソ・ラミレスの義母マリア・デ・ポブレテの兄で、サンタ・カタリナの司祭、ミチョアカンの司教座聖堂参事会員、ドゥランゴおよびマニラの司教、メキシコの司教座聖堂参事会長などを歴任した。また、兄のミゲル・ポブレテ [Miguel Poblete] はマニラの大司教を務めている（在位1653-1667）。

34 マリア・デ・ポブレテ [María de Poblete]：夫ファン・デ・リベラ [Juan de Ribera] は公証人を務めていたが、1648年に病気で引退、1653年に死去した。マリアは、サンタ・テレサ・デ・ヘスス [Santa Teresa de Jesús] の姿が現れるという効験あらたかなパンを作る奇跡を起こすとして評判になった。奇跡は大司教も認めるところとなり、奇跡のパンは大いに売れたが、兄ファン・デ・ポブレテが死去すると、奇跡は捏造だったとの判決が下された。

35 フランシスカ・ハビエル [Francisca Javier]：アロンソ・ラミレスとの婚姻は1682年11月8日、メキシコ市大聖堂にて結ばれた。

そのお名前を口にするだけで、この上ない高貴と美徳がすべて要約されると私はよく存じ上げておりますので、感謝の気持ちは尽きませんが話せば長くなりますゆえ、本意ではありませんがこれ以上は言葉を控えたいと思います。

さて、妻は大変に淑徳な女性でして、私の愛情に愛情をもって応えてくれましたが、幸せな生活は夢のように儚く、わずか11ヶ月しか続きませんでした。と申しますのも、初めての出産で命を落としてしまったからです。予期もしていなかったあまりにも大きな不幸に見舞われた私は、もはや生ける屍となり、すべてを忘れるために、プエブラに戻ったのでした。エステバン・グティエレスという親方のところで大工の職につきましたが、親方自身が食うや食わずの暮らしぶりなのですから、その下で働く職人は何をか言わんやでしょう。成功するなど到底無理だと痛感した私は絶望し、心の中の裁判所に無能の廉でわが身を訴えて判決を下し、その罪を贖うために、メキシコでは犯罪者に課されている刑罰、すなわちフィリピンへの流刑<sup>36</sup>に処すことにいたしました。フィリピンには、アントニオ・ニエト隊長<sup>37</sup>が指揮し、レアンドロ・コエリョ提督<sup>38</sup>が航海士を務めるガレオン船サンタ・ロサ号で渡りました。1682年<sup>39</sup>のことで、カビテ港を目指し、アカプルコ港を出港したのでございます。

36 フィリピンへの流刑：植民地時代を通じて犯罪者はフィリピンに追放されたが、フィリピンではかなりの自由を享受していたとされる。

37 アントニオ・ニエト [Antonio Nieto]：アカプルコ・マニラ間の運航を何度も指揮した人物。アカプルコでは守備隊長も務め、フィリピン滞在中には総督バルガス・ウルタド [Vargas Hurtado] の命でカビテ港防衛のための武器を調達しにマカオや広東にも遠征した。

38 レアンドロ・コエリョ [Leandro Coello]：アカプルコ・マニラ間のガレオン船運航で何度も航海士を務めた人物。その操舵を絶賛する証言が複数残っている。

39 1682年：アカプルコ・マニラ間のガレオン船は、1593年以降、両港から年間2隻づつ運行されるようになっていたが、サンタ・ロサ号でマニラに渡航したというアロンソの証言とは異なり、1682年の1年間、同船はアカプルコに停泊してはならず、アントニオ・ニエトも広東やマニラにいたことが分かっている。1683年6月22日、サンタ・ロサ号はアントニオ・ニエトを乗せてマニラを出港、1684年1月23日にアカプルコに到着するが、同年3月31日にアカプルコを出港するサンタ・ロサ号を指揮したのは、アントニオ・ニエトではなくフィリピン総監として赴任するガブリエル・デ・クルセラエギ・イ・アリオア [Gabriel de Curucelaegui y Arriola] であった。また、アロンソは1682年11月8日に結婚しており、妻と死別するまでの11ヶ月をメキシコで過ごしている。以上を踏まえると、実際にアロンソがフィリピンに渡航するために乗船したのは、1684年3月31日のサンタ・ロサ号か、もしくはレアンドロ・コエリョ提督が航海士を務めた1684年4月4日のサン・アントニオ・デ・パドゥア号 [San Antonio de Padua] だと考えられる。

この港は北緯16度40分に位置しておりますが、港内に退避するナオ船には好都合で安心なもの、住人には（といってもわずかではございますが）不便で苦痛でしかなく、気候は不順で土地は痩せ、真水にも食糧にも事欠いて周辺の町に頼らざるをえず、さらに暑さは耐えがたく、街道には断崖絶壁が多いため、港を出て行くほかないのです。

#### 参考文献

- SIGÜENZA Y GÓNGORA, Carlos, *Los infortunios de Alonso Ramírez*, edited by J. S. Cummins and Alan Soons, London: Tamesis Texts Limited, 1984.
- , *Seis Obras*, edición, notas y cronología de William G. Bryant, Caracas: Biblioteca Ayacucho, 1984.
- , *Infortunios de Alonso Ramírez*, edición de Belén Castro y Alicia Llarena, Universidad de Las Palmas de Gran Canaria, 2003.
- , *Infortunios de Alonso Ramírez*, estudio preliminar y edición de Antonio Lorente Medina, Madrid: Iberoamericana, 2017.
- , *Peripezie di Alonso Ramírez*, a cura di Teresa Cirillo, Napoli: Alfredo Guida Editore, 1996.
- , *The Misfortunes of Alonso Ramírez: The True Adventures of a Spanish American with 17th-Century Pirates*, by Fabio López Lázaro, Austin, University of Texas Press, 2011.
- , *The Misfortunes of Alonso Ramírez (1690)*, edited and translated by José F. Buscaglia-Salgado, Rutgers University Press, 2018.

『聖書 新共同訳』 日本聖書協会 1993年。

『舊新約聖書 文語訳』 日本聖書協会 1993年。

ウェルギリウス『アエネーイス』 泉井久之助 訳 岩波書店 1997年。

